



Title	思い出
Author(s)	石沢, 武; 吉田, 弘夫
Citation	西洋史論集, 3, 125-127
Issue Date	2000-03-08
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/37425">http://hdl.handle.net/2115/37425</a>
Type	bulletin (article)
File Information	3_125-127.pdf



[Instructions for use](#)

## 思い出

そのほかのことは皆…

石川 武

東出君の突然の訃報に接してにわかには信じ難い気持ちに襲われたのは私一人ではあるまい。彼は類稀なほど頑健なように見えていたからである。

学生時代・研究室時代の東出君のことを、と言うのが編集者からの注文である。当時あまりにも同君とのつき合いが深かった私には、何を書けばよいのか容易に決められないほどたくさんの思い出がある。その中の一つだけを紹介させていたたく。

東出君が西洋史に進んだころ、堀米ゼミでは（名著であるとともに難著としても有名な）ブロックの「封建社会」がテキストだった。同君は毎度周到な予習をしてゼミに臨んでいたが、当時助手・院生であつた私も先輩から見ても、お世辞にもものすごく語学ができるとか、頭が切れる学生とは言えなかつた。

卒論を書く段になつて、私も先輩は、東出君がそもそも期限までに書けるのか、また、その出来栄えはとひそかに心配していた。何とか卒論を書き上げて提出した後、同君は堀米先生の部屋に呼ばれた。心配していた通り、先生の批評は長時間にわたり、同君はなかなか戻つてこなかつた。

ようやく戻つてきたとき、東出君は意外にも晴れやかな顔をしていた。「どうだった？」という私の質問に対して、「あれだけ事細かく多くの点について具体的に指摘された以上、そのほかのことは皆評価していただけたものと思つています」というのが同君の答えだった。困難な問題に直面したときのこうした受け止め方、それにもとづく無類の粘りと努力、それが同君を大きく育て上げたことは改めてコメントするまでもあるまい。心から同君のご冥福を祈る。

## 東出さんのこと

吉田 弘 夫

東出さんが亡くなられてもう一年以上になるのだが、心のよりどころになつていた大切なもの一つが失われてしまったという居住いの悪さがいまだにつづいている。私と同年代で北大西洋史研究室での生活をされた方々は、おそらく、同様の気持ちをもつておられるのではないかと思う。東出さんは長いこと西洋史研究室の軸としての役割を果たされた。「車軸の時代」という言葉があるけれども、東出さんは私たちにとつてまさに車軸の人であつた。

私は昭和二八年に北大に入学し、学部移行をして西洋史研究室に入ったのは昭和三〇年のことである。私は西洋史研究室の九期生、東出さんは三年先輩の六期生だったから、東出さんはその時すでに修士課程の二年目で、修士論文の準備をしていらつしやつた。当時の西洋史研究室は、後に第一期黄金時代と呼ばれることになつた時期にあつ

た。堀米庸三先生を中心に、板倉勝正先生、鳥山成人先生の三先生が教鞭をとられ、井上泰男、石川武、平城照介の三先輩が眼のくらむような研究活動をおられた。このようなときに、私の世代が大学に入学したということは研究室にとつてかなり重大な出来事だったらしい。なぜならば、私は生粋の新制中学、新制高校の出身者であったからだ。当時、「レクラム文庫を読んだ世代」、「岩波文庫を読んだ世代」、「岩波新書しか読まない世代」という世代分類が語られていた。「原書を読んで育った世代」、「翻訳にせよ原典を読んだ世代」に対して「原典をパラフレーズしたものを読む世代」という意味だったようだ。現在、大学における学生たちの知的あり方が問題になっているとすれば、そのはしりはわれわれの世代だったということになるだろう。この分類が誰によってなされたものかは知らないけれども、これを私に話されたのは東出さんであった。この話をされたとき東出さんは、「ご自分の敬愛する三先生、三先輩の学的雰囲気、それとはまったく異質のわれわれ以降の世代に伝えるために、自らが両者を結ぶ軸にならねばならないと考えておられたに違いない。それからほとんど毎日、そして夜もしばしば、私は学問研究のイロハから、人生訓にいたるまで鞭撻の雨、霰を受けることになった。なんとわくわくする毎日だったことだろう。東出さんに会いさえすればいつでもあの日々が再現できるといふ思いが、今の今まで、私の心のどこかにあったのだ。準備しておられた論文「フイエフIIラント考」について毎日のように話さうかがったのもこのころのことである。東出さんも私たちに話をすることで論文の構想をまとめてゆかれたのだろうけれども、私たちはそ

の話から論文のテーマがどのようなにして選ばれたのか、その研究が諸先生、諸先輩の研究とどう関係があるのか、研究をつづけることにどのような悩みがあるのかを知り、学問研究とは何か、大学とは何かを知ることになったのだ。

東出さんはやがて助手になられ、研究室の車軸としての役割をいかになく発揮されることになった。東出さんの助手としての活動は多岐におよんだ。ご自分の研究に加えて、図書が発注、整理、研究室の運営、所属学生のサポート万般、そして必要ときには先生方の生活のお世話まで。なかでも学生に対しては、勉学の助言から生活の支援まで多くの時間をあてられていた。東出さんの助手時代には、機会あるごとに、卒業生も加えたパーティーが幾度となく催されたが、これは学生の就職のために、すでに各界で活躍をしておられる諸先輩との顔つなぎをしてやろうとの東出さんの意図によるものであった。

だが、東出さんの車軸としての活動の最大の成果は「身分制研究会」の組織と、運営であったろう。東出さんが助手になられた当時、西洋史研究室では、堀米先生はすでに東京大学へ移られており、つづいて板倉先生は中央大学へ、鳥山先生はスラブ研究施設に転出された。それからは、お迎えした成瀬治先生が孤軍奮闘される時代となった。この時、東出さんの念頭にあったことは、成瀬先生を中心に諸先輩を含めた研究室の結束をいかに保つか、堀米先生の学術的伝統をいかに新たな研究室に継承するかということであったはずだ。新任の成瀬先生はドイツ近世史を専門にいらつしやる。諸先輩は中世史の専門家である。そこで東出さんの考えられたことは、堀米先生の国

家発展の三段階「封建制—等族制（身分制）—絶対制」のうち身分制をテーマにするならば、中世史の研究者も近世史の研究者も糾合した研究会を組織できるだろうということであったのだと思う。これは便宜的な選択ではなかった。当時、私たちは、第十回国際歴史学会（ローマ大会）の報告書を勉強していた。そこには、欧米における身分制研究の動向が紹介されていたし、絶対王政研究の再検討を示唆するフリッツ・ハルトウルクとローラン・ムニエの共同報告も掲載されていた。身分制研究の機は熟していたのである。このようにして東出さんはまたしても二つの時代を結合する役割を果たされたのだ。この研究会の第一回が石川武先輩による高柳信一氏の「近代プロイセン国家成立史序説」の論評ではじまったこと、東京でも研究会が開催され、そこに堀米先生、木村尚三郎先生をお迎えしたことなどを思い出す。東出さんはこの研究会では、ローマ大会の報告書で *corporatists* に対する *institutionalists* と分類された英米の身分制研究について紹介しておられたし、私もラッセル・メージャーの「ルネサンス王政」について、アルマン・レビヨンの「ブルターニュ三部会」について二度報告する機会を与えられた。そしてこの研究会は成瀬先生のお力により、先生の「絶対主義国家と身分制社会」に集約される画期的な研究を生み出すきっかけとなった。こうして北大西洋史研究室は堀米先生の中世国家論につづいて、成瀬先生の絶対王政国家論の誕生を見ることになったのである。

東出さんのおかげで、私はその後、成瀬先生のご研究を学ぶ研究生活を送ることになった。東出さんはどうだったのだろうか。その後、私

は就職をして、東出さんと頻繁にお会いすることがなくなった。King's clerk についてのライフワークの選択、進行をめぐるエピソードを語ることは私にはできない。しかし、この研究も出発点は身分制研究会にあるのだと思う。そこでは身分制と官僚制の関係が、研究会の当初から、中心的なテーマの一つだったのだから。